

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32607

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780385

研究課題名(和文) 身体機能老化プロセスにおける心理的自律性のメカニズム：高齢者の精神的健康との関連

研究課題名(英文) Mechanism of psychological autonomy for mental health in community-dwelling elderly

研究代表者

深瀬 裕子 (Fukase, Yuko)

北里大学・医療衛生学部・講師

研究者番号：80632819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、老化の過程において精神的健康を保つための心理的要因を抽出し、その心理的要因を測定する方法について検討した。その結果、1) 身体的な健康が維持された前期高齢者においては老いを受容するよりも心理的自立を実感することが精神的健康の維持に役立つこと、2) 高齢者への投映法検査は有用であるが、認知機能の低下の影響を考慮する必要があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify psychological factors for maintaining mental health in aging and to examine methods for measuring these psychological factors. Result indicated that 1) acceptance of ageing might be important for elderly people who have a physical disability and several restrictions in their daily life, and 2) some project methods were useful tool to assessment for elderly, however it is necessary to consider cognitive decline.

研究分野：臨床心理学

キーワード：精神的健康 地域在住高齢者 心理的自律性 質問紙開発 投映法検査 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

医学の進歩等により、心身の機能が老化しながらも長寿を全うできるようになった。これに伴い、これまでのようなアンチエイジング研究だけでは精神的健康を支えられないこと、老化と上手く付き合いながら健やかに生きることを目指す研究が重要であることが指摘されている。これら老化を前提とした研究は次の3つに類型できる。住まいの調整や福祉制度への提言など、高齢者をとりまく環境整備に関する研究、家族や介護士といったケアする側のメンタルヘルス維持・向上といったサポーターの調整に関する研究、高齢者自身への提言やカウンセリングなど、高齢者本人に直接アプローチする研究。特に についての研究は、サンプリングと要因の測定方法に限界があることから研究は困難とされているが、高齢者本人へのアプローチは重要かつ有効であり、高齢者に適した心理検査が求められている。

そこで本研究では高齢者本人に直接アプローチするために、心理的自律性に着目した。心理的自律性は、「自己決定、自由、独立、選択と行動の自由を含む諸概念 (Collopy, 1988)」と定義され、高齢期における心理的自律性は、「自分の生活や生き方において、その範囲が限られていても、自己決定・選択性・意思性を持っているという実感」を指す (Bekker et al., 2006)。すなわち、老いという避けられないプロセスにおいて、意思をもって生きる“感覚”を維持することを意味しており、老化の中で精神的健康を維持するための“最後の砦”といえる。

高齢期における心理的自律性を具体化するために半構造化面接を行った先行研究では、高齢期に体験する老化や変化の中でも身体機能の老化は無力感や絶望感を引き起こし、高齢者の精神的健康に脅威を与えやすいことが示された (深瀬・荒井, 2013)。誰もが経験する老化である身体機能の低下によって、生活は大きく変動し、心理的自律性を発揮できないと、精神的健康度は下がりやすいことが示唆されたのである。これらの研究において、高齢者の心理的自律性は心理的自立と老いの受容の2軸による仮説モデルが生成されている。

また、投映法による心理検査である主題統覚検査は、ロールシャッハ・テストよりも現実に近い心理的葛藤や人間関係を投映すると考えられている心理検査である。31枚のカードから被検査者の問題や状態によって任意のカードを選択できること、各カードで物語を1つ作成し、その都度、検査者の質問に答えるという実施方法の特徴から、高齢者に適した検査であると考えられる。しかし、その妥当性については、特に高齢者を対象には十分な検証が行われていない。

2. 研究の目的

身体的老化の過程において精神的健康に

寄与する心理的要因を明らかにするために、(1) 心理的自律性を測定する質問紙を開発し、その役割を検討し、(2) 開発した質問紙検査に投映法検査等の検査を組み合わせ、高齢者への適用について検討した。

3. 研究の方法

(1) 心理的自律性尺度の開発とその役割の検討

心理的自立性および老いの受容の2下位尺度で構成される心理的自律性尺度を作成した。項目は先行研究から収集し、一部は高齢者に適した文言に修正した。

作成した自律性尺度を含む質問紙調査を、在宅で生活する65歳以上の高齢者を対象に郵送法および留置法によって実施した。約1000部を配布し、610部を回収し、回答に欠損の少ない572部を分析対象とした。

(2) 高齢者を対象とした心理的要因の測定方法の検討

シルバー人材センターに登録している65歳以上で認知症の診断のない高齢者58名を対象に募集した。対照群としてA大学の1年生60名にも同様の調査を実施した。

調査は大学の研究室で個別に行った。TATは8枚のカードを用い(カード1, 2, 3BM, 6BM, 10, 12BG, 14, 16)、反応内容はICレコーダーで録音し、後日、テキストデータに起こした。その他、(1)で開発した心理的自律性尺度、主観的健康状態、ADL尺度、STAI、GDS短縮版、MMSE、PGCモラルスケール、Big Five尺度短縮版についても調査を行った。

TATの指標・分類として、成人や精神疾患患者を対象とした先行研究 (Aronow, Weiss, & Reznikoff, 2001; Bellak, & Abrams, 1997; Cramer, 2004; 鈴木, 1997) から抑うつとの関連が指摘されている42の指標(カードごとに3-8指標)を抽出し、これらの指標に基づいて研究対象者の作成した物語を分類した。

4. 研究成果

(1) 心理的自律性尺度の開発とその役割の検討

心理的自律性尺度は、探索的因子分析では想定した2因子が得られなかったため、確認的因子分析を行ったところ、高い信頼性係数が得られ、妥当性についてもある程度確認された(表1)。高齢者を対象にした尺度において、少ない項目数で構成されることも有用である。今後、本尺度を用いることで心理的自律性の経年変化や効果的な維持・向上の方略が明らかになると期待できる。

次に、年代(前期高齢者、後期高齢者)ごとに心理的自律性、IADL、精神的健康の関連を分析した(図1)。その結果、前期高齢者は老いの受容と精神的健康が負の関連を示した。したがって、身体的な健康が維持され

表 1 . 心理的自律性尺度の確認的因子分析

項 目	共通性	因子 負荷量
自律性・独立性 (α=0.79)		
自分には、決断する力がある	0.53	0.73
自分で選んだり決めたりするのが好きである	0.51	0.71
自分の判断に自信を持っている	0.47	0.68
自分の考えや意見を自由に言うことができる	0.46	0.68
老いへの調整力 (α=0.56)		
今までできたことができなくなっても、受け入れられる	0.45	0.67
年をとった自分を受け入れることができる	0.41	0.64
以前とは違う自分らしさについて考えるようになった	0.14	0.38
因子間相関		0.67

た前期高齢者においては老いを受容するよりも心理的自立を実感することが精神的健康の維持に役立つこと、老いの受容はより老化の進んだ場合に有用である可能性が示唆された。

また、心理的自立は、年齢にかかわらず精神的健康との強い関連が認められた。さらに老いの受容と心理的自律性にも高い相関関係が認められた。本研究の対象者は高い IADL 得点が示されたことから、健康度が高い者と考えられる。したがって、生活自立度の高い高齢者の場合、心理的自立の実感が精神的健康に有用であること、老いの受容は心理的自立を介して精神的健康に影響する可能性が示唆される。

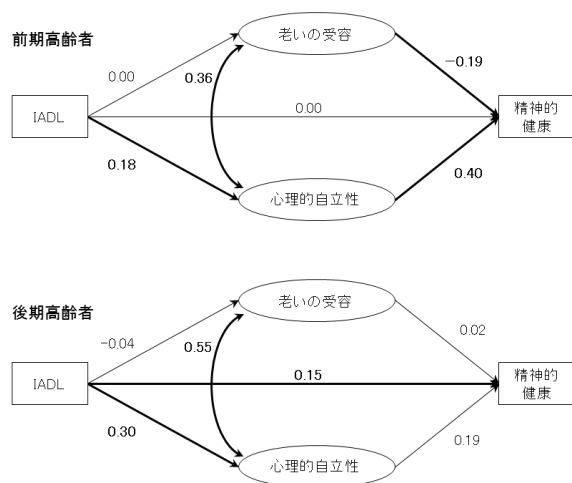


図 1 . 年齢による心理的自律性と精神的健康の関連 (太字は統計的に有意だったもの)

(2) 高齢者を対象とした心理的要因の測定方法の検討

高齢者は抑うつ高群 14 名、低群 44 名であり、大学生は抑うつ高群 29 名、低群 31 名だった。TAT の 42 指標について群ごとに検定を行った結果、7 指標において年齢や抑うつの高低との関連が認められた。例えばカード 6BM において大学生の抑うつ低群と抑うつ高群は、先行研究で一般的な反応として挙げられている「カードの若い男性と年配の女性は対等、あるいは男性の方が優位な関係」とする反応が多かった。一方、高齢者の抑うつ低

群では「年配の女性の方が若い男性よりも優位な関係」とする反応が多かった。また、白紙のカード 16 では、先行研究で稀な反応として指摘されている「白色に規定されない」反応が、大学生の抑うつ低群と抑うつ高群では少なかったが、高齢者の抑うつ低群では多かった。なお、全 42 指標中 24 指標では、4 群とも先行研究で示された一般的な反応を示した。

以上の結果から、主題統覚検査において抑うつのない高齢者に特有の反応がいくつかの指標で示されたと考えられる。カード 6BM におけるカードの若い男性と年配の女性の関係は、先行研究の示唆とは異なり、高齢者においては年配の女性を優位とする反応が一般的である可能性が示された。年齢の近い人物に同一化しやすいことと、高齢者の生活満足度や自尊心が影響したものと考えられる。また、白紙カードで多くの大学生が白色に基づく反応をしていたのに対し、多くの高齢者が人生観などの白色に基づかない自由な反応をした。これは、新規場面での戸惑いや不安に際し、高齢者は経験に基づく対処方法が豊富であるために不安や戸惑いが心理的に解消されやすかった、あるいは独自の解消方法を獲得しているために白色ではなく経験に基づく反応をした可能性がある。

ただし、多くの指標において抑うつ低群と高群が同じ反応を示し、抑うつ指標としての有効性は認められなかった。本研究の研究対象者が精神疾患患者ではなかったため、抑うつや偏った認知的特徴が現れにくかった可能性がある。また、抑うつ以外の性格や防衛機制との関連も検討する必要がある。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

- (1) 大澤茉依・深瀬裕子・村山憲男・田ヶ谷浩邦 (2017). 母親とのスキンシップとグッドイナフ人物画知能検査による幼児の知能の関連 北里大学附属臨床心理相談センター紀要, 5, 28-36. 【査読あり】
- (2) 高橋麻由子・村山憲男・深瀬裕子・田ヶ谷浩邦 (2017). 夜勤シミュレーション中の持続的注意の変化 『ブルーライト』遮断・非遮断による影響の違い 北里大学附属臨床心理相談センター紀要, 5, 1-10. 【査読あり】
- (3) 村山憲男・太田一実・松永祐輔・深瀬裕子・井関栄三・佐藤 潔・田ヶ谷浩邦 (2016). WAIS-III と WMS-R の得点差を用いた軽度認知障害の早期発見 各得点差のカットオフ値・感度・特異度 老年精神医学, 27, 1207-1214. 【査読あり】
- (4) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子・松永祐輔 (2016). 睡眠障害のメカニズム MB Med Reha, 203, 7-12. 【査読なし】

- (5) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2016). 不眠, 不眠症 薬局, 67, 74-83. 【査読なし】
- (6) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2016). 閉塞性睡眠時無呼吸症候群とうつ病 Depression Strategy, 6, 13-15. 【査読なし】
- (7) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2016). 睡眠薬と睡眠時無呼吸症候群 THE LUNG perspectives, 24(1), 49-58. 【査読なし】
- (8) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2015). メチルフェニデート 日本臨牀, 73(9), 1511-1515. 【査読なし】
- (9) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2015). 認知症と睡眠障害・睡眠習慣 睡眠医療, 9, 247-249. 【査読なし】
- (10) Murayama N, Endo T, Inaki K, Sasaki S, Fukase Y, Ota K, Iseki E, Tagaya H. (2015). Characteristics of depression in community-dwelling elderly people as indicated by the tree-drawing test. Psychogeriatrics. DOI: 10.1111/psyg.12142. 【査読あり】
- (11) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2015). 概日リズム睡眠 覚醒障害 概日リズム睡眠障害 日本臨牀, 73(6), 942-948. 【査読なし】
- (12) Murayama N, Ota K, Kasanuki K, Kondo D, Fujishiro H, Fukase Y, Tagaya H, Sato K, & Iseki E. (2015). Cognitive dysfunction in patients with very mild Alzheimer's disease and amnesic mild cognitive impairment showing hemispheric asymmetries of hypometabolism on 18F-FDG PET. International Journal of Geriatric Psychiatry. DOI: 10.1002/gps.4287【査読あり】
- (13) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2015). 不眠症治療薬 「薬で眠らせる」は不可! そもそも治療が必要な不眠か? G ノート, 2(2), 282-288. 【査読なし】
- (14) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2015). 加齢による睡眠の変化 ねむりとマネージメント, 3(2), 5-8. 【査読なし】
- (15) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2015). 大学生の睡眠・覚醒障害 Progress in Medicine, 35(1), 83-86. 【査読なし】
- (16) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2014). その不眠をどう治療するか, あるいは治療しないか 概日リズム睡眠 覚醒障害 精神科治療学, 29(11), 1393-1398. 【査読なし】
- (17) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2014). 睡眠障害の検査法 都薬雑誌, 36(9), 15-19. 【査読なし】
- 〔学会発表〕(計27件)
- (1) 深瀬裕子・荒井佐和子・沖井 明・鈴鴨 よしみ・菅 俊光. 在宅脳卒中片麻痺者の痙縮治療における周囲の影響 日本健康心理学会第 29 回大会. 2016 年 11 月 20 日, 岡山大学 (岡山県岡山市)
- (2) 荒井佐和子・深瀬裕子・沖井 明・鈴鴨 よしみ・菅 俊光. 慢性期脳卒中片麻痺者におけるボツリヌス治療を選択する過程 GTA と TEM による混合研究法 日本質的心理学会第 13 回大会. 2016 年 9 月 25 日, 名古屋市立大学 (愛知県名古屋市)
- (3) 深瀬裕子・松永祐輔・高橋麻由子・小室 阿里紗・村山憲男. 絵画統覚検査のカード 2 における前景と後景の統合・処理 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集. 2016 年 9 月 6 日, パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市)
- (4) 高橋麻由子・松永祐輔・深瀬裕子・村山憲男. 夜勤シミュレーション中の持続的注意の変化 『ブルーライト』遮断・非遮断による影響の違い 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集. 2016 年 9 月 6 日, パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市)
- (5) Fukase, Y., Murayama, N., & Tagaya, H. Development of the 3-item psychological autonomy scale for the elderly in Japanese. The 31st International Congress of Psychology. 2016 年 7 月 25 日, PACIFICO Yokohama (Yokohama, Japan) (oral).
- (6) 藤原佳典・原田 謙 (座長) 安永正史・村山 陽・高橋知也・田淵 恵・深瀬裕子(話題提供者)自主企画フォーラム「実証研究における「Generativity」の評価の現状と課題」第 58 回日本老年社会科学大会 2016 年 6 月 12 日, 松山大学 (愛媛県松山市)
- (7) 深瀬裕子・村山憲男・田ヶ谷浩邦. TAT (絵画統覚検査) の図版 3 BM に現れる高齢者の心理的特徴 第 58 回日本老年社会科学大会 2016 年 6 月 11 日, 松山大学 (愛媛県松山市)
- (8) 深瀬裕子・村山憲男・田ヶ谷浩邦. 高齢者の精神的健康に関する仮説モデルの検証 身体・社会・心理的要因の関連を含めて 日本発達心理学会第 27 回大会. 2016 年 5 月 1 日, 北海道大学 (北海道札幌市)
- (9) 片井美菜子・高橋 恵・深瀬裕子・小山 幸代. 病院看護師における認知症対応力向上研修前後での, 認知症患者に対する印象と対応への不安についての変化 日本早期認知症学会. 2015 年 10 月 10 日, 朱鷺メッセ (新潟県新潟市)
- (10) 深瀬裕子・村山憲男・田ヶ谷浩邦. 高齢者用心理的自律性尺度の開発 日本心理学会第 79 回大会. 2015 年 9 月 23 日, 名古屋国際会議場 (愛知県名古屋市)
- (11) 深瀬裕子. 知的障害のある女性高齢者のロールシャッハ反応 日本心理臨床学

- 会第 34 回大会論文集. 2015 年 9 月 19 日, 神戸国際会議場 (兵庫県神戸市)
- (12) 荒井佐和子・深瀬裕子・沖井 明・鈴鴨 よしみ・菅 俊光. 生活期脳卒中片麻痺者における痙縮治療体験 (2) 対照的な経過をたどった 2 事例の比較 日本健康心理学会第 28 回大会. 2015 年 9 月 5 日, 桜美林大学 (東京都町田市)
- (13) 深瀬裕子・荒井佐和子・沖井 明・鈴鴨 よしみ・菅 俊光. 生活期脳卒中片麻痺者における痙縮治療体験 (1) 治療選択から初回治療後の効果発現・漸減までの 5 事例の比較 日本健康心理学会第 28 回大会. 2015 年 9 月 5 日, 桜美林大学 (東京都町田市)
- (14) Suga, T., Okii, A., Nakanowatari, T., Fukase, Y., Arai, S., & Suzukamo, Y. The Psychological Influence of the East Japan Earthquake on Patients with Total Hip Arthroplasty. 2015 APA Annual Convention, 2015 年 8 月 8 日. (Toronto, Canada) (poster).
- (15) Fukase, Y., Murayama, N., & Tagaya, H. The role of the psychological autonomy in the elderly with declining physical activity using multigroup analysis. The 14th European Congress of Psychology. 2015 年 7 月 9 日 (Milano, Italy) (poster).
- (16) 田ヶ谷浩邦・松永祐輔・高橋麻由子・小室阿里紗・大澤茉依・深瀬裕子・村山憲男. 450-500nm の帯域の特異的遮断は、高照度光下での夜勤シミュレーション中に交感神経に優位な状態を引き起こしたが、遂行能力、認知機能には影響しなかった. 日本睡眠学会第 40 回定期学術集会. 2015 年 7 月 1 日, 栃木県総合文化センター・宇都宮東武ホテルグランデ (栃木県宇都宮市)
- (17) 田ヶ谷浩邦・松永祐輔・高橋麻由子・小室阿里紗・大澤茉依・深瀬裕子・村山憲男. 450-500nm の帯域の特異的遮断は、高照度光下での夜勤シミュレーション中に交感神経に優位な状態を引き起こしたが、遂行能力、認知機能には影響しなかった. 日本睡眠学会第 40 回定期学術集会アブストラクトシンポジウム. 2015 年 7 月 1 日, 栃木県総合文化センター・宇都宮東武ホテルグランデ (栃木県宇都宮市)
- (18) 田ヶ谷浩邦・松永祐輔・高橋麻由子・小室阿里紗・大澤茉依・深瀬裕子・村山憲男. 450-500nm の帯域の特異的遮断は、高照度光下での夜勤シミュレーション中に交感神経に優位な状態を引き起こしたが、遂行能力、認知機能には影響しなかった. 日本睡眠学会第 40 回定期学術集会 DataBlitz. 2015 年 7 月 1 日, 栃木県総合文化センター・宇都宮東武ホテルグランデ (栃木県宇都宮市)
- (19) 深瀬裕子・村山憲男・河村晃依・柴 喜崇・上出直人・田ヶ谷浩邦. 評定者のエイジズムが投映法の解釈に及ぼす影響 高齢者が描いた 2 枚のバウムテストを用いた検討 日本老年社会科学, 36. 2015 年 6 月 13 日, パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市)
- (20) 村山憲男・遠藤忠・稲木康一郎・佐々木心彩・深瀬裕子・太田一実・井関栄三・田ヶ谷浩邦. バウムテストで描かれた木全体のサイズに示される地域在住高齢者の抑うつの特徴. 第 30 回日本老年精神医学会. 2015 年 6 月 13 日, パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市)
- (21) 菅 俊光・沖井 明・中野渡達哉・深瀬裕子・鈴鴨よしみ. 療法士への転倒関連自己効力感拡大に関する教育が療法士に与える満足感について 第 52 回リハビリテーション医学会学術集会. 2015 年 5 月 28 日, 朱鷺メッセ (新潟県新潟市)
- (22) 深瀬裕子・荒井佐和子・沖井 明・鈴鴨 よしみ・菅 俊光. 在宅脳卒中患者がボツリヌス治療を選択する過程について 第 40 回日本脳卒中学会総会. 2015 年 3 月 26 日, リーガロイヤルホテル広島・メルパルク広島・NTT クレドホール・広島グリーンアリーナ (広島県広島市)
- (23) 深瀬裕子・村山憲男・田ヶ谷浩邦. 身体機能老化プロセスにおける心理的自律性の働き 日本発達心理学会第 26 回大会. 2015 年 3 月 20 日, 東京大学本郷キャンパス (東京都文京区)
- (24) 深瀬裕子・荒井佐和子・沖井 明・鈴鴨 よしみ・菅 俊光. 生活期脳卒中片麻痺患者における痙縮治療の体験 2 回の縦断データに対する GTA による検討 日本健康心理学会第 27 回大会. 2014 年 11 月 1 日, 沖縄科学技術大学院大学 (沖縄県国頭郡)
- (25) 深瀬裕子・村山憲男・河村晃依・柴 喜崇・上出直人・田ヶ谷浩邦. 評定者のエイジズムが投映法の評定に及ぼす影響 中国四国心理学会第 70 回大会論文集, 47, 78. 2014 年 10 月 26 日, 広島大学 (広島県東広島市)
- (26) Fukase, Y. Phenotypes of psychological autonomy in the elderly using cluster analysis. 28th International Congress of Applied Psychology, 2014 年 7 月 11 日 (Paris, France) (poster).
- (27) Nishimura, M., & Fukase, Y. 4 patterns and urging factors to new environment for disabled elderly people. 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, 2014 年 6 月 19 日. PACIFICO Yokohama (Yokohama, Japan) (oral).

〔図書〕(計 2 件)

- (1) 田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子 (2016). 精神疾患(うつを中心として) 祖父江逸郎・柳澤信夫・鈴木隆雄・塩見利明・土井由利子・内山 真・清水徹男・内村直尚・山寺 亘・伊藤 洋・竹内 暢・井上雄一・山田尚登・篠邊龍二郎・水野創一・堀口 淳・宮本智之・田ヶ谷浩邦・村山憲男・深瀬裕子・千葉 茂・安田麻美・吉澤門土・中山明峰・蒲谷嘉代子・宮崎総一郎・北村拓朗・林 光緒・萩野浩・山中章弘(共著) 高齢者の睡眠とその障害 長寿科学振興財団 pp. 151-159.
- (2) 深瀬裕子 (共著) (2014). 神経性習癖の理解と対応 石田 弓(編著)・兒玉憲一・荒井佐和子・勝見吉彰・大中 章・林 智一・深瀬裕子・高田 純・信原孝司・渡辺 亘・岡本祐子・尾形明子・大塚泰正(共著) 教師教育講座 第 11 巻 教育相談 協同出版 pp. 105-117.

〔その他〕(計4件)

- (1) 深瀬裕子 平成 28 年度 相模原市 健康長寿教室 介護者のための認知症教室 2017年3月14日, 相模原市老人福祉センター若竹園 (神奈川県)
- (2) 深瀬裕子 平成 27 年度 相模原市 健康長寿教室 認知症の方とコミュニケーションをとるコツ 2016年1月29日, 相模原市老人福祉センター若竹園 (神奈川県)
- (3) 深瀬裕子 老いのこころとメンタルヘルス 北里大学附属臨床心理相談センター 市民講演会. 2014年11月15日, ユニコムプラザさがみはら (神奈川県)
- (4) 研究成果発表用ホームページ
<http://square.umin.ac.jp/fukase/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深瀬 裕子 (FUKASE, Yuko)
北里大学・医療衛生学部・講師
研究者番号: 80632819